2011 年 5 月 26 日放送

第 61 回日本皮膚科学会中部支部学術大会②
シンポジウム５「白斑としみ Up-to-date」より

「尋常性白斑患者の QOL とメイクアップケア外来」

京都大学大学院　皮膚科講師
谷岡　未樹

カモフラージュメイクの皮膚科診療における立場

カモフラージュメイクは白斑をカバーするだけであり、決して治癒改善させるものではありません。尋常性白斑の治療は近年のナローバンド UVB あるいはエキシマランプの導入により改善率は上昇してきました。しかし、尋常性白斑は治療に抵抗性である場合や、治療が奏効するまで長期間を要することが稀ではありません。さらに、尋常性白斑は患者の生命予後にはかかわらなくとも患者の生活の質(QOL)を低下させていることが認知されつつあります。特に露出部に病変が存在する場合にはその心理的および社会的影響は大きいと推定されます。さらに、カモフラージュメイクは単純に患者の皮膚病変を隠すだけではなく、患者の QOL を上昇させることが諸外国の調査から報告されています。

メイクアップケア外来設立の経緯と運用

京都大学皮膚科では、2005 年 4 月に白斑専門外来を開設し、2007 年 10 月からメイクアップケア外来を立ち上げました。この外来を通して、カモフラージュメイクの工夫を報告するとともに、その QOL に与える影響を検討してきました。メイク指導は医師の管理下のもと NPO 法人メディカルメイクアップアソシエーションと（株）資生堂から派遣されたボランティアスタッフによりマンツ

疾患	人数(%)
尋常性白斑	78 (74.3%)
SLE	4 (3.8%)
DLE	3 (2.9%)
術後瘢痕	3 (2.9%)
酒さ	3 (2.9%)
皮膚筋炎	2 (1.9%)
Vogt-小柳-原田病	2 (1.9%)
抗癌剤による色素沈着	2 (1.9%)
血管種	2 (1.9%)
カフェオレ斑	1 (1.0%)
外傷後瘢痕	1 (1.0%)
脱毛症	1 (1.0%)
遺伝性対側性色素異常症	1 (1.0%)
汗孔角化症	1 (1.0%)
強皮症	1 (1.0%)

京都大学皮膚科のメイクアップケア外来を受診した患者105名の疾患内訳

ーマン指導で、かつ、無償で行われております。これまで、小児から高齢者まで１００名以上の皮膚疾患患者さんがメイクアップケア外来を受診されました。

メイクアップケア外来を始めて私が印象的だったのが、暗い顔つきで通院されていた白斑の患者さんがコアもフラージュメイク後に急に明るくなり笑顔を取り戻したことです。私の医学的治療よりもカモフラージュメイクが勝っていると認めざるを得ない出来事でした。このような経験を何度かさせていただいたことが、カモフラージュメイクの患者 QOL に与える影響を調査する動機付けとなりました。

メイクアップケア外来のニーズ

我々が、当初に想定していたメイクアップケア外来のニーズは、露出部の病変を他人の視線から隠したいというものでした。例えば、「名刺交換の際に、取引先から手背の白斑を注視されるので隠したい」、「露出部の白斑を隠したい」といった希望です。しかし、露出部以外の病変に対する希望者も存在したため、カモフラージュメイクを希望した理由を聞いてみると、痕に述べるような多様なニーズが明らかとなった。

- 温泉旅行のときだけ大腿部の白斑を隠したい。（50 代男性）
- 社交ダンスで露出の多いドレスを着るときに見える部分の病変を隠したい。（50 代女性）
- 孫が帰省し、一緒に入浴したときに下腹部の白斑を隠したい（70 代男性）
- 婦人科検診を受ける際に、外陰部の白斑を隠したい（60 代女性）
- 着物で習い事するときに襟元の病変が見えるので隠したい。（40 代女性）

尋常性白斑は目に見える病変なので患者心理に与える影響の大きさを再認識いたしました。

メイクアップケア外来での工夫

我々は、メイクアップケア外来を通してカモフラージュメイク技法を患者に紹介するだけでなく、新規のカモフラージュメイクにおける工夫を報告してきました。広範囲の白斑に対しては、白斑すべてをカバーする必要はなく、境界部にグラデーションを付けてコントラストをなくすことで非常に目立ちにくくなります。また、カモフラージュメイクが日常生活中に落ちてくることが課題であったため行われるようになった工夫が非アルコール性皮膜を用いたメイク後のカバーです。カモフラージュメイクにより白斑は全くわからないようにできますが、それだけにカモフラージュメイクが他人の前ではがれ落ちることはなんとしても避けたいという気持ちが生まれます。カモフラージュ専用化粧品は、それ自体落ちにくい性質を持っていますが、非アルコール性皮膜をメイク後に使用することで入浴するまでメイクが落ちないようになりました。

メイクアップケア外来の効能

多くの患者さんが、自分の皮膚病変を隠そうと独自のメイクを施していましたが、うまく行かないと感じていました。メイクアップケア外来を通して皮膚疾患をカモフラージュする専用化粧品の存在を認知することで、適切な化粧品の選択を検討できました。さらに専用の化粧品を購入するだけでなくメイクのコツを伝授してもらうことが重要で、マンツーマンで実際にメイク方法を学べることも有用でした。また、コツがつかみにくい、あるいは、忘れてしまうといった事情から、数回にわたってメイクアップケア外来を受診する患者もおられました。尋常性白斑の場合、夏と冬で白斑周囲の皮膚色が濃くなったり薄くなったりするので、季節的な微調整も必要となります。アフターケアの重要性を感じるデータでした。

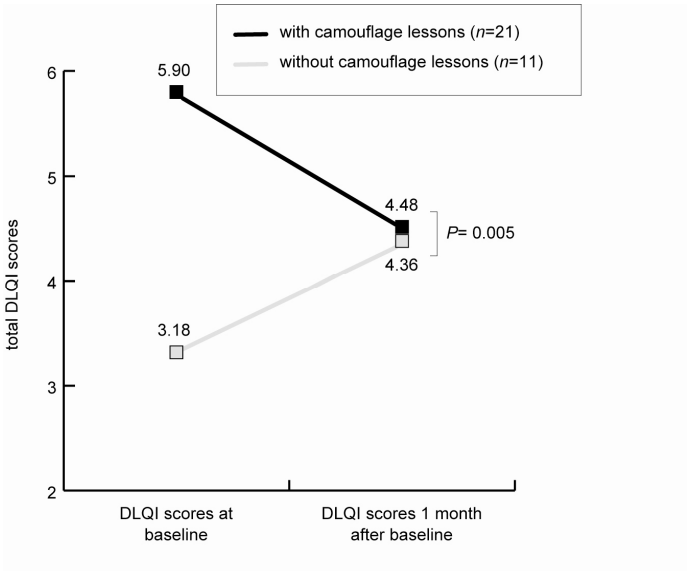
額の白斑
上：カモフラージュ前
下：カモフラージュメイク後

手首から手にかけての左右対称な尋常性白斑：
左手のみ境界部のコントラストがなくなるように
左：手背側　右：手掌側

手背の尋常性白斑
左：カモフラージュ前
右：カモフラージュメイク後

メイクアップケア外来は尋常性白斑患者の QOL を改善する

メイクアップケア外来が患者の QOL に与える影響を評価するために、受講前後で DLQI（Dermatology life quality index）によるアンケート調査を行いました。メイクアップケア外来受講後、カモフラージュメイクを継続し１ヶ月経過した後に再度、同じアンケートに記入していただきました。受講後には受講前よりも DLQI のスコアが低下しており、患者の QOL の改善がみられました（右図）。また、DLQI サブスコアのうちメイクアップケア外来受講群では症状／感情のスコアが改善していました。これは、カモフラージュメイクにより服装や日常生活の自由度が増したことによると推測されました。



メイクアップケア外来の今後

開設当初は、白斑専門外来に付属した白斑のカモフラージュメイクを中心に行っておりましたが、メイクアップ外来前後による尋常性白斑患者の QOL の向上が明らかとなったため、他の疾患にも対象を広げて行われるようになりました。現在では、血管腫、膠原病による皮膚病変、術後瘢痕などにも対象患者を広げており、良好な結果をえております。

また、東京大阪の大都市圏に限られますが、グラファラボラトリーズや資生堂は、医師からの紹介がある患者さんを対象に無償でメイクアップ指導を行う施設を有しています。我々の調査やこれまでの報告から、適切に実施されればカモフラージュメイクが尋常性白斑を含む皮膚疾患患者の QOL を向上させることは疑いがありません。しかし、現状では、医療保険制度に化粧指導が含まれていないため、京都大学病院皮膚科では無償で、ボランティアスタッフによりメイクアップ指導が行われているのが現状です。また、他の施設においてもカモフラージュメイクは独自の方法で提供されています。さらに、東京や大阪以外の地域では、カモフラージュメイクへのアクセスに限りがあります。各地域の拠点病院において対象患者さんがカモフラージュメイクに適切にアクセスできるようにすることが望ましいと考えております。今後、どのような枠組みを持ってメイクアップケア外来を患者のアクセスしやすいものにしていくかが最大の課題といえます。